

マルクス・エンゲルス・レーニン対スターリン

—その共通性と相違性—

鈴木重靖

目次

プロローグ

1. 何が問題か？
2. マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン主義
3. レーニンの思想
4. スターリンの思想
5. スターリンはマルクスの社会主義思想を忠実に実行しなかったか？
6. マルクスとエンゲルスがやったこと
7. レーニンがやったこと
8. スターリンがやったこと
9. マルクスが社会主義社会を建設したら？
10. 肅清はスターリンに固有なものか？

エピローグ

プロローグ

宗教も一種の思想であり、思想も一種の宗教である。この意味はこうだ。少なくとも、原始宗教のようなものでないかぎり、宗教も何等かの思想体

系をもちあるいは思想的背景をもっている。宗教は信仰と結びついているが、この信仰は必ずしも神とはかぎらない。それはしばしばその宗教の開祖つまり人間に対する信仰である。むしろこの方が多いだろう。ただ多くの信者が必ずしもそれを意識していないだけのことである。また思想もそれを信じている者にとっては、時には宗教を信じている者以上に、信仰に近い信念と結びついている。ただそれが必ずしも神に対するものとはかぎらないだけである。しかも、その思想が一定の体系をもち社会に何等かの影響力をもっているような場合には、宗教の場合と同じように、しばしばそのルーツとなっている人物に対するある種の信仰がその思想を信じている者たちの間に存在する。

政教分離という言葉がある。政教分離は今日では先進諸国をはじめとして多くの国々で制度として採用されている。わが国でもそうである。これは歴史的にはキリスト教会と政府との対立と妥協の結果として生まれたものであるが、今日では個々人の信教の自由を保障するために近代国家で採用されている制度である。いかなる宗教も大体その宗教団体をもっているが、ある宗教団体が国からなんらかの特権をうけ、また政治上の権力を行使できるような立場に立つならば、それ以外の宗教に対する信仰の自由や宗教団体の活動の自由が奪われるだけでなく、場合によっては一般の思想や信条の自由さえもそこなわれる恐れがあるのである。つまり独裁政治の恐れがあるのである。何故なら、多くの場合、一つの宗派は他の宗派に対して排他性をもっており、政治権力をバックとして一つの宗派の宗教を広めることは強制的に他の宗派の宗教の活動を障害し、さらにはそれに関連する思想や信条に対してさえもそれを抑圧する危険性があるからである。

政教分離が近代国家として望ましい制度であるならば、つまり政治権力に宗教団体に関与しないということ、より一般的には国と宗教との分離という原則が望ましいものであるならば、政教分離もまた望ましい制度ということになろう。ここで政教分離とは政治権力に思想団体ないし思想集団が関与しないということである。宗教と政治権力との結合が危険であると

いうならば、思想と政治権力との結合は一層危険なはずである。何故なら、今日では宗教（心）をもっているものよりも思想をもっているもののほうが多く、それだけ影響が大きいためである。つまりある一つの思想が政治権力を自由にできるならば、それと異なる他の非常に多くの思想が、一種の思想である宗教をも含め、排除あるいは抑圧される恐れがあるからである。

しかし、これまで政教分離ほど政想分離は問題にならなかった。それは、次のような理由によるものと思われる。第一に、かつてドイツや日本など幾つかの国の軍事政権や独裁政権によって、これらの政権に反対する自由主義団体や平和団体また共産党や労働者党など思想団体とみられるものが弾圧され、これと結びついて広範な国民の思想、信条、信教の自由が奪われるという苦い経験があったということ。第二に、多くの思想団体は政権奪取をめざしているが、政権を担当している通常の政党や政治団体も多かれ少なかれ思想的背景をもっており、両者を区別することは事実上困難だということ。第三に、宗教の定義もかなりあいまいではあるが、思想の定義はさらにあいまいであること。思想ないしそれに類するものは、単なる人生観や処世術から社会や政治や経済に対する体系づけられたものまで、極めて多種多様である。

そこで、われわれが政想分離が必要だといっても、これは次のようにならないざるをえないだろう。第一に、対象となるのは政権を目指している思想団体ないし思想集団であること。第二に、これらは通常政党という形式をとっているから、これらを法的に政治から排除することはできないし、またそうすることは好ましくない。何故なら、このことによって、かえって一般国民の思想・信条・信教の自由を阻害する恐れがあるからである。このことは過去の歴史で経験済みである。したがって、第三に、政権を取ると危険である——つまり独裁政権になる恐れがある——という思想団体（政党）を国民が選挙によって政権から排除するということである。

では、どのような思想団体（政党）がこの種の危険性をもつものといえ

るだろうか。先ず、自由と民主主義を体系づけた思想あるいは自由と民主主義を基礎としなければ成立しないような思想の団体は、大体危険度は低いといえるだろう。より一般的にいえば他の思想に対して排他性をあまりもたず、他の思想との共存を認め、むしろそれを前提とするような思想（団体）は危険度は低いといえる。これと反対の思想（団体）はその反対の程度に応じて危険度は高くなるというよいであろう。次に、これがきわめて必要なことであるが、国民の意向が明らかになれば——通常これは選挙によるが——いつでもその政権を放棄する用意があるし、またこれが可能な条件をいつでも作っておくような思想（団体）であれば危険度は低いし、反対の場合は危険度は高い。

1. 何が問題か？

マルクス主義あるいはマルクス・レーニン主義といわれる思想とその集団については、上述の危険度はどの程度のものであろうか。その極度の独裁政治あるいは全体主義をもって知られ、またそれ故に崩壊したソ連や東欧諸国は、国内的にも国際的にも一般にマルクス主義あるいはマルクス・レーニン主義をその思想的基盤としていると言われまた考えられてきたから、その危険度がきわめて高いことは、いわば歴史的に実証されているようなもので、極めて明らかで、いまさら論議の余地はないようにみえる。しかしながら実はそうではない。この一見きわめて明らかにみえる結論に今日なお疑問を提示あるいは反論を加える人たちがいる。特に今でもマルクス主義あるいはマルクス・レーニン主義を信奉ないし支持している人々の中にこの傾向は強い。

この疑問ないし反論の主たるものは次のようだ。上述の危険度の高い思想とはスターリン主義のことであって、マルクス主義あるいはマルクス・レーニン主義のことでない。つまり、マルクスやレーニンの考え方・思想とスターリンのそれとは根本的に違うのである。中村静次氏の表現を借

りれば、両者は天と地、月とスッポンの開きがあるのである。⁽¹⁾ソ連や東欧諸国の社会主義制度が崩壊したのは、これらがスターリン主義にもとづいて形成されたからである。もし、マルクス主義やマルクス・レーニン主義に忠実にしたがって、社会主義社会を建設したとしたら、ロシアや東欧諸国はあのようにひどい社会とはならなかったであろうし、また崩壊の憂き目にあうようなこともなかったであろう。つまり、もし、マルクスやレーニンが社会主義社会や共産主義社会の建設に携わったならば、自由で豊かなこれらの国をつくったであろう。スターリン肅清などはただスターリンという特定の個人とのみ結び付く特殊の現象であって、マルクスやレーニンとは全く無縁である。

このような疑問ないし反論について、以下これをいくつかにわけて、論じてみよう。

注。(1) 中村静治「現代世界とマルクス理論の再生」、大月書店、1992年、139ページ。

2. マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン主義

スターリンをマルクスやエンゲルスまたレーニンたちと比較する場合には、これを3つの観点から比較することができる。その一つは考え方ないし思想の間の比較である。次は思想とやったこととの比較である。そして三番目に、やったこととやったこととの比較である。

これまで、スターリンとマルクスたちを比較する場合には、主として二番目のスターリンのやったこととマルクスたちの思想とが比較されることが多かった。しかし、思想つまり考えることとそれにもとづいて行動すること（またその結果）とは別の事柄である。一方は頭脳内部のことであり、他方は客観的な社会的現象だからである。厳密に言えば、この両者を「比較する」という言葉は不適當である。正確には、両者がどれだけ「対応し

ているか」といわなければならない。

さて、ここでは、最初の思想の間の比較を述べてみよう。スターリンの社会主義思想はマルクスやエンゲルスまたレーニンのそれと天と地の間ほどの違いがあるのであろうか。別に引用するまでもなく、スターリンはいたるところで自分がマルクス主義者であり、レーニン主義者であるといっている。彼はマルクスやレーニンの思想にしたがってロシアにソ連という社会主義国家を建設した。しかし反対論者はいう、「彼が『自分はマルクス主義者であり、レーニン主義者である』というのは嘘である」と。だが、なぜスターリンだけが嘘をつかなければならないのか。彼がやった行為、社会主義社会を建設するという行為が、マルクスやレーニンたちの心に描いていた社会主義社会と違っていたからといって、スターリンの心に描いた社会主義社会がマルクスやレーニンのそれと違うと何故いえるのか。マルクスやレーニンとスターリンの心に描いていた社会主義社会は同じだが、つくられた社会主義社会がその通りにはならなかったと何故いえないのか。スターリンはそういっているのに、何故スターリンの言葉だけを信用できないのか。

スターリンが内外の共産主義運動の指導的地位を確保してから彼の死とともにその地位を失うまでの間、大体1930年代から1950年代前半までは、マルクス・レーニン主義は、マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン主義と4名の名を連ねて呼ばれるのが通例であった。このことはこの4名の思想が同一基盤に立ち、前者から後者へと理論が発展していくものと解されていたことを物語るものである。当時ソ連は勿論、資本主義をも含む多くの国々で、一般にそのようにみられていたのであって、今日になってそれを変えなければならない理由は何もない。何故ならスターリンの思想そのもの——それは彼の書いたり言ったりしたものから導きだされたものであるが——は、スターリンの死ぬ以前も以後も、そして今日にいたっても変わらないままでいるからである。後になって彼の指導による社会主義社会が中央集権的独裁的であり、また彼の行為が残忍で冷酷であること

がわかったとしても、このことによって彼の思想そのものは変わることはないのである。

だから、ソ連や東欧諸国の社会主義社会は、当時から呼ばれそして今日でもそう呼ぶことを変える必要のない、というより変えることのできないマルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン主義にもとづいてスターリンとその後継者たちによって作られたとみななければならない。少なくとも思想に関するかぎり、スターリンだけをマルクス・エンゲルス・レーニンから切り離す理由はない。

これに対して次のような反論ができるかもしれない。スターリンが死ぬまでは彼の権威に押されて、またソ連や東欧の秘密主義・情報不足によって、スターリンの思想を十分検討できなかったのだ。よくよく検討してみればスターリンの思想はマルクスなどとは天と地の差があることがわかったのだというのである。こういうこともないとはいえない。しかし、情報不足だったのはスターリンの行為であり、その行為の結果としてのソ連の現実であって、スターリンの思想ではない。資料その他によって、スターリンの思想に若干加えるものや変更があったとしても、それは僅かであって、スターリンの思想の主要な内容は当時も今も殆ど変わってはいないのである。もし一步譲ってスターリンの思想の解釈が変わったというならば、マルクスたちの思想についても、彼らの行為や政策によって実現したと考えられる現実から同様に解釈し直すか、これに真剣に取り組まなければならない。マルクスたちが革命に成功せず、社会主義社会の建設に携わらなかった——レーニンはほんの入り口だけ参加したが——ことをよいことにして、スターリンの思想だけを彼の行為や実績から解釈し直す、それも正反対のかたちで解釈し直すというのはあまりに手前勝手というものである。

思想の相違だけを強調しようとするならば、スターリンだけでなく、レーニンやエンゲルスまでもマルクスのそれから切り離さなければならなくなるであろう。エンゲルスとマルクスはマルクス主義思想の創始者として、しばしば思想的に一体のものとして考えられてきているけれども、厳密に

みれば、両者は完全に同じというわけではない。最近では両者の相違を強調しようとする見解さえあらわれている。⁽²⁾私はこの種の見解に組するものではないが、ただ相違だけを詮索しようとすれば、いくらでも見出しうることを指摘したかっただけである。二人は別人格なのだから、このことはいわば当然のことである。しかし、エンゲルスとマルクスとの間では、主要な問題について、二人とも思想的にほぼ一致あるいは互いに補いあっていたとみて差し支えないと思う。

注。(2) エンゲルスとマルクスとの相違を強調しようとする見解については、中村静治氏の前掲書、第2章「エンゲルスと宇野経済学」および第3章「いま甦るエンゲルス」を参照のこと。

3. レーニンの思想

革命後、戦時共産主義の頃までは、レーニンは一つのことを除いて、ほぼマルクス・エンゲルスの思想に忠実であったとみてよいであろう。この一つのこととは、レーニンが、ロシアに生まれ、ロシアで育ち、ロシアで革命を起こしたことによって運命づけられた、いわば不可避的なことであったが、しかし同時に、マルクス・エンゲルスとレーニンとの決定的な相違を生むものでもあった。つまりマルクスらは、彼らの唯物史観また資本主義観からして、社会主義革命は原理的にいって最も進んだ資本主義諸国で生じるようになっていたが、レーニンはこれを修正し、遅れた資本主義国でも世界社会主義革命の起爆剤として最初に革命を起こすことができると主張し、この主張にもとづいてロシアで革命を起こし、またこれに成功したのである。これ以後、このレーニンの思想に忠実だった革命の指導者たちは社会主義革命はまず後進国で始まるのだという思想を定着させてしまった。そしてまた事実、表面上これに類似したような革命が中国、朝鮮、キューバ、その他東欧諸国という遅れた国々で相次いで発生したのである。

レーニンはこの一点を除いては、「一国で社会主義が最後の的に勝利することは不可能であり」⁽³⁾「ロシア人が火蓋をきり、そのあとを追ってドイツ人、フランス人、イギリス人がつぎつぎと社会主義革命を勝利させていくであろう」⁽⁴⁾と、マルクス・エンゲルスの主張する世界同時革命、連続革命を主張している。また権力を取った労働者階級は資本家階級に対して独裁権を行使し、資本家階級を一掃し社会主義・共産主義の社会を建設していくのである。そして社会主義社会とは、資本家や地主のいない、そして商品・貨幣のない（ないしそれに向かって進む）、価値法則に支配されない生産手段の社会的所有にもとづく計画経済の社会であり、共産主義社会とはそれを更に徹底した国家ですらなくなる社会であるという点でも、彼はマルクスらと殆ど完全に思想を一にしている。

しかし、彼はこの世界同時革命や商品・貨幣なき社会への前進という社会主義革命の思想を1921年のネップ（新経済政策）を境にして事実上放棄した。というより放棄せざるをえなくなった。彼はこの放棄に「退却」という言葉を付加したけれども、この退却はその後大きな論争を生み、結果として、スターリンに政権を譲ることとなったのである。この退却の責任はレーニンにあるというよりも、実のところ、先進諸国における世界同時革命論や商品・貨幣なき社会というマルクスやエンゲルスの社会主義思想の非現実性、空想性にその根源があったのである。

レーニンはネップにおいて、取引の自由とか商業に学べとか外資導入だとかという政策を打ち出し、マルクスらの思想と事実上決別したのである。だが、われわれは誰もこのことをもってレーニンをマルクス主義者ではなくなったとはいわないであろう。なぜならレーニンは当時の環境からして実践上やむをえずそうしたのであって、思想的には彼はマルクスらと基本的に変っていないとみられているからである。

注。(3)レーニン「労働者、兵士、農民代表ソビエト第三回大会」、レーニン全集、第26巻、大月書店、480ページ。

(4)レーニン，同上，481～482ページ。

4. スターリンの思想

スターリンはどうか。スターリンがレーニン亡きあと、レーニンの思想に——少なくとも表頭上は——忠実であろうとしたことは、「レーニン主義の基礎」、「レーニン主義の諸問題」をはじめ彼の書いたものや彼のいったことなどからして極めて明らかである。彼はレーニン亡きあと、しばらくはレーニンの終わりごろの政策、ネップや一国社会主義の政策を引き継いだ。しかし数年後、つまり第一次五カ年計画の発足（1928年）頃から、スターリンはネップを止めるなどしてレーニンから離れ、一国社会主義論を別とすれば、むしろレーニンによって捨て去られたマルクスやエンゲルスの基本的思想——生産手段の非私有化・社会化・農業の社会化（集団化）、経済の計画化、商品・貨幣経済（市場経済）からの脱皮をより徹底させること——を復活させようと努力したとみることができる。そして第二次世界大戦以後は、東欧や中国その他の国々の社会主義革命を勝利させる条件をつくることによって、マルクスらの世界同時革命ないし連続革命の思想を事実上実現し、一国革命論を超えたということもできる。

スターリンはレーニンの死後、このロシア革命を成功させたナンバーワンの指導者を凌ぐ尊敬を得また指導力を発揮できるようになったのは、彼の政治的才能もさることながら、スターリンこそがレーニンと並ぶいやそれ以上の本当のマルクス主義者、真の科学的社会主義の思想の持ち主、ロシアに共産主義社会を建設するために努力している英雄と多くのマルクス主義活動家に認められたためだと考えることもできる。⁽⁵⁾

レーニンがマルクス主義者として、その名をとどめるならば、レーニンよりもマルクスの思想に忠実であったスターリンが、マルクス主義者ではないとか、トロツキーにならって、マルクス主義の裏切者であるとかいうのは全く不当といわなければならない。

レーニンにしてもスターリンにしても、彼らの思想がマルクスやエンゲルスのそれと全く同じでないことは確かである。このことは前者の活動した時代、場所つまり環境が後者のそれと違うかぎり当然のことである。レーニンにせよスターリンにせよ、たとえマルクスやエンゲルスの思想の影響を大きくうけたとはいえ、やはり彼らは自分自身の思想で革命を行いまた社会主義社会の建設に取り組んだのである。マルクスやエンゲルスまたレーニンの一言一句とスターリンのそれとを対比してその違いをあれやこれやと詮索してもあまり意味のあることではない。革命思想といったものは、その基本的方向で一致していれば、共通思想と考えてよいもの、同じ主義と考えてよいものである。

フランス革命の指導者たち、たとえばロベスピエールやマラーは、たとえ彼らがルソーやモンテスキューと全く同じ思想でなくても、ルソーやモンテスキューと共通の思想で革命を指導したとみて差し支えないし、明治維新の指導者たとえば、高杉晋作にしても木戸孝允にしても吉田松陰思想の持主とみてよいのである。彼らは彼らの師と仰ぐ人々の書いたものや言ったことの一言一句を覚えているかもしれない。しかし、彼らが革命を遂行するときには、決してその通りに実行したわけではない。師の生きていた時も場所も違う、つまり師の思想が生まれたときと革命のときと環境が違うのである。つまり、革命遂行期の思想とそれに影響を及ぼした思想とは完全に同じというわけにはいかないのである。

注. (5) たとえばチプロは次のようにいっている。「20年代の終わりには、……商業に学べといい、また利潤を生めといていたレーニンよりもスターリンのほうが党の活動家や新しいソビエトのインテリゲンチヤにとって、より親近感があった」（“Наука и жизнь”, No. 12, 1988. ただし, Alec Nove, ed., “The Stalin Phenomenon”, Wiedenfeld & Nicolson, London, 1993, p. 15. より引用）

5. スターリンはマルクスの社会主義思想を 忠実に実行しなかったか？

次の問題、スターリンのやったことと、マルクスたちの考えたこと＝思想との関係についてみてみよう。つまり、スターリンがマルクスたちの社会主義思想をどれだけ忠実に実行し、またそれに相応しい社会主義社会を実現したかという問題である。

思想ですらも、その人間が生きた環境が違いそれぞれ個性が違うのであるから、いくらスターリンがマルクスたちの思想に忠実であろうとしても、その思想が彼らのそれと完全に同じであることは不可能であり、またその必要もない。ましてマルクスらの思想を現実に実現しようとしたら、一層思想と現実との距離が大きくなるのはいわば当然である。19世紀の思想を20世紀に実現しようというのである。少なくとも50年以上離れているし、環境も違う。このような大きな距離や相違があるにもかかわらず、スターリンはマルクスやエンゲルスまた（ネップ以前の）レーニンの社会主義思想に極めて忠実であり、彼らの社会主義像に近い社会主義社会を実現しようと努力したといえる。皮肉ではあるが、まさにスターリンのこのマルクスたちへの忠実さが、ソ連や東欧の社会主義社会を崩壊に導いたといえるのである。

思想は一旦形成されれば、なかなか変化しないものである。特にその思想が巨大な体系をもち、一つの完成した内容と形式をもっているような場合には一層そうである。なるほど、その思想の持ち主が存命中にはそれを修正したり、発展させたりすることは可能である。が、その思想の持ち主が故人となった場合には、その思想は完全に固定した不変のものとなる。

現実はずえず変化していくものである。人間社会に関する現実であれば、変化は一層激しいものとなる。したがって、思想が人間社会を説明したようなものであれば、それがよほど抽象的でどんな社会にも通用するようなもの——このようなものは大体において思想的に無内容なものであるが

——でないかぎり、思想と現実が完全に一致することはありえない。まして故人の不変となった思想がその後の変化した社会現象を説明できたり、それが、現実と結びついた政策や運動に直接役立つとはとても考えられない。もし、こういう当然のことを忘れて、一つの思想を正当なものとして絶対化し、その思想を現実には押しつけるような形で、その思想と直結した社会的な政策や運動を行うならば、早晩その政策や運動は失敗し、歴史の審判をうけることになる。

レーニンやスターリンが取り組んだロシア革命や社会主義社会の建設は、実際に行われた現実的なことである。しかし、彼らがそのために利用した思想は、それよりも数十年前、マルクスやエンゲルスの頭脳から生みだされたものである。なるほど、マルクスやエンゲルスの思想はその当時の社会的現実を多かれ少なかれ反映している。しかし、その現実にはレーニンやスターリンの現実ではない。レーニンやスターリンにとっては、その思想は彼らにとってはかなり前の他人の思想に過ぎない。いくら頑張ってもロシアでの革命や社会主義の建設がマルクスやエンゲルスの思想や考え通りにいかないことは明らかである。またそれらはレーニンやスターリン自身の思想や考え通りにさえいっていない。両者は違う次元のものだからである。コラコフスキーはいつている。「いかなる社会も思想だけから生まれることはありえないし、その社会の建設に貢献した人々の思想によってさえ説明されるものでもない⁽⁶⁾」と。

レーニンは理想主義者であると同時に現実主義者でもあった。彼はマルクス主義を高くかかげながら、ロシア革命を成功させ、土地、企業、銀行、鉄道等の国有化を断行し、関税による保護貿易というブハーリンらの主張をしりぞけて貿易の国家独占を指令し、国内戦と外国からの干渉戦を闘いぬいた。これらの政策は必ずしもマルクスの考えた生産手段の私的所有の否定とその（国有を含む）社会的所有や計画経済という社会主義経済と同じとはいえなかったが、事実上これと形式上オーバーラップしていたのである。レーニンの採った政策は実は内乱や戦争に対処した一種の軍事経済

政策だったのだが、このとき採られた政策は「戦時共産主義」といわれているように、マルクスのいう社会主義ないし共産主義経済と類似するものだったのである。だからレーニンを含む当時のボリシェビキ指導部はこの政策が社会主義ないし共産主義社会へと直結するかのよう考えていたのである。

しかしこのような考えは、急速に進んだ生産低下、飢餓、インフレ等による経済破綻とそれに結び付いた大衆の不满——それはクロンシュタットでの暴動で最も先鋭化した形で表面化したのであるが——によって、放棄せざるをえなくなったのである。かくしてレーニンたちはネップという市場経済導入政策へと政策を転換せざるをえなくなったのである。これはレーニン自身がいうように、一時的にせよ、社会主義から遠ざかる「退却」であり、したがってまたマルクス主義からの「退却」でもあったのだ。だがマルクス主義からの退却はマルクス主義からの離脱、マルクス主義の放棄ではなかった。レーニンはそれでも依然として優れたマルクス主義者としてとどまっていたのである。

スターリンはレーニンによって修正された政策を、数年たってからではあったが、再修正した。「退却」を「前進」に、というより「突撃」に変えたのである。農業を除く総ての産業のより完全に近い国有化、農業の集団化、高度に集中化した計画経済と急速な重工業化という道を超スピードで突き進んだのである。これはスターリンがマルクスによって示された社会主義そして共産主義への道をより速やかに進んで行くことを決意したからにほかならない。スターリンはマルクス主義をさらにレーニン主義を大きく発展させ、それをソ連や東欧の社会主義国に実現し、世界の共産主義運動に模範を示したものとして、レーニンと同等のあるいはそれ以上の筋金入りの「優れた」マルクス主義者として称えられ、またスターリンの時代には実際にそのようにソ連の国民に、また内外の共産主義者たちにみられ、かつ尊敬を受けていたのである。

マルクス主義の思想を現実に応用した、それをロシアその他の社会主義

国に実現したという観点からしても、スターリンをマルクス・エンゲルス・レーニンから切り離すことのできないことは明らかであろう。

注. (6) R. Tucher, ed., "Socialism", New York, p. 283. (ただし A. Nove, *ibid.*, p. 10 より引用)

6. マルクスとエンゲルスのやったこと

さて、スターリンとマルクスたちのやったことを比較してみよう。既に指摘したように、これまでのこの比較といえ、スターリンのやったこと (had done) とマルクスたちの思想 (考えたこと thought about) との比較——正確には比較ではなく、対応でなければならない——が主であった。スターリンのやったこととマルクスたちのやったことを比較することはこれまであまりなされたことはなかった。しかしスターリンとマルクスたちとを公正に比較し、両者の間の共通面と相違面とを正しく判断するためには、この比較をも見逃してはならないであろう。

マルクスやエンゲルスも確かに社会主義者・共産主義者としてこれに関連する運動に参加した。たとえば、正義者同盟 (のち共産主義者同盟と改称) に2人とも参加し、ロンドンにおけるその第二回大会に出席している。そして2人はこの同盟の宣言の起草者となり、1848年にはかの有名な「共産党宣言」を発表している。マルクスは1848～49年のフランス (二月革命) やドイツ (三月革命) での革命運動に参加し、ベルギー政府やプロイセン政府から追放や退去命令を受けるなどしている。1864年には国際労働者協会 (第一インターナショナル) のロンドンでの創立者の一人となり、創立宣言と規約を起草、その中央委員会 (のち総務委員会と改称) の委員として活躍している。ハーグでの国際労働者協会第五回大会 (1872年) ではバクニンらアナキストたちと激しく対立し、マルクスは彼らの除名の中心的存在となったが、同時にこの協会の統一は破壊され、本部のニューヨー

クへの移転というエンゲルスの提案とその移転をもって、事実上崩壊した（正式解散は1876年）。マルクスもエンゲルスも母国ドイツでは、カウツキーやベーベルや彼らの指導するドイツ社会民主党を通して、ドイツでの社会主義運動に大きな影響を与えた。

以上のように、マルクス及びエンゲルスは、当時19世紀の半ばから後半にかけてフランス、ドイツを中心とするヨーロッパでの社会主義運動にかなりの役割を果たしたけれども、彼らは当時の社会主義運動の指導者、左翼ラディカリスト、左翼のインテリゲンチヤや労働運動で活躍している一部の労働者の間でだけ知られていたものであり、彼らを通してだけ社会主義・共産主義運動に影響を及ぼしたにすぎない。彼らは一般大衆には殆ど知られていなかったし、したがってまた、彼らは多くの大衆を動員し、彼らの思想に従って社会主義革命を実行し、それを成功させるというようなことはとてもできなかった。フランス二月革命にせよ、ドイツ三月革命にせよ、またマルクスが最も注目したパリ・コムューンにせよ、マルクスらはこれらに大きな役割を果たすことはできなかった。勿論これらのことは、マルクスやエンゲルスの責任だけというわけではない。その責任の大部分は当時の歴史的諸条件にあったといえよう。

彼らの功績の主要な部分はやはり、その執筆活動であり、発表されたその論文や著書である。マルクスは「ライン新聞」、「新ライン新聞」、「独仏年誌」、「ニューヨーク・デイリー・トリビューン」、「新オーデル新聞」、「フォルク」等多くの新聞ないし雑誌に数え切れないほどの時事評論や論文を書いている。著者や論文もマルクスのそれは、「哲学の貧困」、「経済学批判」、「資本論」など膨大な量にのぼり、エンゲルスのそれも、「イギリスにおける労働者階級の状態」、「住宅問題」、「家族、私有財産、国家の起源」などマルクスに匹敵するような量となっている。「ドイツ・イデオロギー」や「共産党宣言」のように二人で共同に執筆したものもある。

これまで述べてきたことからわかることは、マルクスおよびエンゲルスの歴史に残した功績の主たるものは、彼らが生きたもの、考えたこと、つ

まり思想であって、彼らの革命運動や社会的活動（の結果）ではない。この後者にかんして、これをスターリンと比較してみればその差は歴然である。国内は勿論国際的にも一般大衆に知られたその有名度、大衆を把握しそれを革命運動や労働運動また民族運動として動かす力、そして何よりも、この地球上を社会主義圏（共産圏）と資本主義圏とに二分し、冷戦という一つの時代を形成したその影響力は、ジンギスカンやナポレオンをも凌駕するものといわなければならないだろう。

勿論19世紀と20世紀とは違う。20世紀もその後半ともなれば、産業、科学・技術、交通・情報網など19世紀のそれと比較できないほど発展している。ここでは、原水爆という恐るべき武器も存在している。こういったことを考慮しなければならないが、しかし、その思想的影響力は別として、マルクスやエンゲルスのやったこととその結果が世界の社会主義運動およびその他の運動に与えた影響力は、これをスターリンのそれと比較してみれば、後者のほうがはるかに大きいことはあきらかである。さきの中村氏の言葉を借りれば月とスッポンの差があるといってもよいほどである。20世紀特に20年代から80年代の末までの間、マルクスやエンゲルスの思想的影響もキリスト教やイスラム教に匹敵するほど大きかったが、それもスターリンのおかげといえる。その前半は彼の偉大さと彼に対する尊敬によって、そしてその後半は彼の極悪さと彼に対する誹謗によって、マルクスやエンゲルスはその名を広く世界にとどめたのである。しかし、ソ連、東欧崩壊後は、彼らの名もまた世界から消え去ろうとしている。つまり、スターリンのつくった社会・国家そして世界の興亡とマルクス・エンゲルスの思想的影響の興亡とは運命をともにしているのである。

7. レーニンのやったこと

マルクスやエンゲルスはその革命運動や社会的活動つまりやったことよりもその思想つまり考えたことの方が、歴史的影響や歴史的役割は大きか

ったといったが、レーニンについては、これとは対照的に革命運動や党活動また彼の指導する政府として行った実際の政策つまりやったことのが、その思想つまり考えたことよりも歴史的影響や役割は大きかったといっ
てよいであろう。

レーニンにも「ロシアにおける資本主義の発展」、「帝国主義論」、「市場理論の問題への覚書」、「唯物論と経験批判論」、「哲学ノート」など直接革命を論じたものではない著書や論文が多々あるし、これらを通して彼の哲学、経済学、歴史学についての知識の広さとマルクス主義思想の深さを知ることができる。これらが当時および後世に与えた影響は確かに大きい。

しかし、何といても、彼の最大の歴史的役割は、ロシア革命を成功させたことである。これに対してはなんびとも異論をさしはさむものはいないであろう。ロシア革命が世界に与えた衝撃は、彼の思想が与えたそれをはるかに超しているといっ
てよいであろう。彼は革命、内戦、干渉戦を闘いぬき、マルクスの描いた社会主義社会をロシアのみならず、ヨーロッパ諸国にも広げようとした。しかし、数年後に彼は彼が思っていたよりも容易かつ短期間に、これが可能でないことを悟った。彼は「はずみをつけて、まえより強く前へ跳躍するために」という言葉をつけ加えることを忘れなかったが、やはり「後方へ退却」せざるをえなかったのである⁽⁷⁾。この退却がいわゆるネップ（新経済政策）である。この政策は、彼がその打倒、消滅を目指していた「古い社会経済制度、商業、小営業、小企業、資本主義を打ち砕くのではなく、商業、小企業、資本主義を活気づけ」⁽⁸⁾、外資導入のために、「外国の地主、資本家を招き」、「ブルジョア諸国とロシアと貿易する」⁽⁹⁾ような政策であったのである⁽¹⁰⁾。

レーニンは、「跳躍のための後退」という彼の言葉にもかかわらず、この政策を「歴史的な一時代が必要である。うまくいけば、10年か20年でこの時代を通りすぎるができるかもしれない」⁽¹¹⁾とかなりの長期を予想していたようである。もっともこの彼の言述からもうかがえるように、彼はそれほどしっかりした見とおしをネップに関してもってはいなかった。彼

の生命はこれについて十分考えることができるほど、長くはなかったのである。

彼はまた、ネップとともに、世界革命もヨーロッパ革命もあきらめた。そして「ロシア社会主義共和国が資本主義の包囲のもとで（一国で）存立していく⁽¹²⁾」という道を選んだ。これは事実上の一国革命論であり、マルクスの世界同時社会主義革命論からの後退であった。

- 注. (7) レーニン「モスクワ・ソヴェト総会での演説」、レーニン全集、第33巻、454ページ。
- (8) レーニン「現在と社会主義の完全な勝利ののちの金の意義について」、レーニン全集、第33巻、100ページ。
- (9) レーニン「蓄音機のレコードに録音された演説」、レーニン全集、第32巻、398ページ。
- (10) レーニン「ソヴェト共和国内外情勢について」、レーニン全集、第33巻、212ページ。
- (11) レーニン「協同組合について」、レーニン全集、第33巻、490ページ。
- (12) レーニン「第九回全ロシア・ソヴェト大会」、レーニン全集、第33巻、146ページ。

8. スターリンがやったこと

レーニンはマルクスやエンゲルスができなかったこと——社会主義革命を成功させるということ——をやった。この点ではレーニンはマルクスらを超えたといえる。スターリンはそのレーニンを超えただろうか。スターリンはレーニン以上に考えたことよりやったことにおいて、大きな影響力を世界におよぼしている。というより、スターリンは思想的にはこれといった大きな業績を残していない。なるほど彼にも「弁證的唯物論と史的唯物論」、「ソ同盟における社会主義の経済的諸問題」、「マルクス主義と民族問題」その他いくつかの民族問題に関するものや「マルクス主義と言語学の諸問題」といった場違いの論文めいたものもある。しかし、これらは後

世いづれもあまり高く評価されていないものである。スターリンが書いたものは、ソ連政府の政策に関するもの、また共産党の活動に関するものといった種類が大部分である。

これをみると、マルクス・エンゲルス・レーニンらが経済学、哲学、歴史学等々に広汎な知識をもつ大思想家ないし理論家とみられていたのに対して、スターリンはこの面ではかなり彼らより見劣りがする。おそらく、スターリンはこう見られるのがいやで、その対抗意識から、以上のような著書や論文を書いたのであろう。彼は史上類を見ないような強大な権力と尊敬を集めていたし、またソ連の人々は勿論他国のマルクス主義者たちからも、彼は偉大な天才的人物と呼ばれていたから、彼は自分の著書や論文でこれが嘘でないことを人々に示したかったのであろう。「言語学の諸問題」などは、彼がマルクスやエンゲルスまたレーニンすらももちあわせないような、多方面に才能をにもつ天才的人物であるかを見せたかったのであろう。スターリンのいうことはなんでも正しい。言語学でも最高権威である。自分もそう思っていたし、人にもそう思わせたかったのであろう。自分の学者ぶり思想家ぶりを示すことの意欲において、さすがのヒトラーですらもここまではいっていない。

しかし、スターリンを大学者、大思想家と呼ぶことには何等の客観性もない。スターリン生存時代の環境がそうしたにすぎない。今日ではこのことを誰でも認めている。しかし、スターリンのやったこと、それが世界の人々に与えた影響は絶大である。それはスターリン個人だけでやったわけではないかもしれない。スターリンを生んだ歴史的條件がそうしたのかもしれない。たとえそうだったとしても、スターリンの行動が世界を揺るがした、とくに第二次世界大戦後の世界を揺るがしたことは誰も否定できないだろう。スターリンの行動が世界に与えた衝動や影響はレーニンのそれを、したがってまたマルクスやエンゲルスのそれを遙かに超えたといえよう。つまり、マルクス主義は行動として、マルクスからエンゲルスそして、レーニンを経てスターリンへと世界に対する衝撃力・影響力を強めていっ

たということができる。

この衝撃力・影響力はスターリンから方向を変え、Uターンしたであろうか。否、そういうことはない。マルクス号は若干の紆余曲折はあったものの、基本的にはその方向を誤らずに、スターリンによって最高度まで上昇し、それから低空化し、フルシチョフ、ブレジネフを経て、ゴルバチョフで遂に墜落したのである。

スターリンはレーニン死後数年ほどはレーニンの政策を忠実に引き継いだ。つまりネップも一国社会主義も、また労働（強制）収容所も、階級敵に対する容赦なき弾圧、追放、殺害（レーニンはクロンシュタットの反乱兵たちやニコライ二世のまだ大人になっていない子供たちまで殺害している）を引き継いだ。だが、ネップだけはこれを5年後には——レーニンはそれよりずっと長期を予想していたのに——放棄した。ネップは明らかにマルクス号の飛行方向からすれば、それからの離脱であり、場合によっては、墜落さえしかねない——つまり資本主義に復帰するかもしれない——ものであった。スターリンはそれを本来のマルクスの社会主義、つまり商品・貨幣なき、資本家なき、高度に生産手段を社会化した、超集中的計画経済に戻すべくつとめた。

レーニンは次のようにいっている。遅れたロシアを工業化し、国民の文化水準を揚げるためには、資本主義的大工業を育てる必要がある。そうすればそこで働く、ロシアではまだ少ない、プロレタリアートもまた育つのだ。しかし、これは資本主義の復活を意味しない。何故なら権力は労働者が握っているからだ。⁽¹³⁾そしてレーニンはこれを社会主義国家による国家資本主義の利用であるといっている。⁽¹⁴⁾

スターリンはレーニンの死の翌年の1925年に、すでにロシアでは国家資本主義は主要な形態ではなくなり、社会主義工業、発達した国有工業が主要な形態になったといっている。⁽¹⁵⁾28年にはネップの拡張は富農に自由を与え、階級闘争とプロレタリアート独裁を軽視するものだときめつけている。⁽¹⁶⁾そして29年には、左からの危険より右からの危険がはるかに大きいと

して、また、右翼的偏向は「資本主義への逆行」の恐れ⁽¹⁷⁾の増大として、ブハーリンらの「市場の解放」とネップの長期化に強く反対⁽¹⁸⁾している。もっとも、スターリンは、表向きはこの時でも、ネップを廃止するとはっていないが。

レーニンも国の工業化を考えていたが、彼はそれを、資本主義企業と市場のある程度の発展と資本主義諸国との貿易および資本の導入を利用するというネップを通して、達成しようとした。しかし、スターリンは、資本主義の包囲の中、自国の独立を守るための国防力をもつためには、そんな悠長なことはしておれず、先進資本主義諸国に工業でまた技術で、できるだけ速やかに追いつき、そしてこれらの国を追い超すことが必要であることを強調⁽¹⁹⁾した。つまり工業の最大限のスピード・アップである。そのためには、スターリンの党および政府がその意のままに、国内の資源や労働力を動員できることが必要であった。そしてこのためにはまた、資本家・地主をソ連から追放することによって、彼らの反抗を完全に封じることが勿論、スターリンの党および政府に反対する勢力は左右を問わず、たとえ革命時の同志であろうと、また技術者やインテリゲンチアさらには労働者、兵士、農民ですらもこれを徹底的に排除するということが必要であった。

スターリンは「ソ同盟にあるような全面的で、広汎な自由がプロレタリアートのために存在している国家は、世界には他にはけっして見出せない⁽²⁰⁾」とか、「多数者（被搾取者）の利益をあらわすプロレタリア民主主義⁽²¹⁾」とかいって、ソ連を自画自賛している。しかし、「プロレタリアートがそれを自由のためにではなく、（階級）敵を抑圧するために必要とする⁽²²⁾」のがプロレタリアートの独裁国家である以上、そして資本家とか地主とか富農とかいう階級敵が存在しなくなったいま、残る抑圧の対象となる敵は党内の同志や労働者や農民など一般の大衆の中に求められることになる。その対象は、スターリンや党に敵対する、またその疑いのあるものという形で、際限なく拡大し、ついには抑圧は国民全体に対する独裁体制へと拡大せざるをえなくなるのである⁽²³⁾。階級の敵とみなされた囚人たちの数

はいよいよ増大し、レーニンによって造られた収容所もまたますます増設され、そこに収容された囚人たちは、一般の労働者や農民の低賃金と労働強化に加えて、無報酬の強制労働でスターリンの工業化政策に奉仕するということになるわけである。超高成長を示したスターリン時代の工業化政策の実態とはまさにこういうものだったのである。

- 注. (13) レーニン「新経済政策と政治教育部の任務」、レーニン全集、第33巻、53ページ。
- (14) レーニン「食糧税について」、レーニン全集、第32巻、372ページ。
- (15) スターリン「ソ同盟共産党（ボ）第14回大会」、スターリン全集、第7巻、大月書店、374～375ページ。
- (16) スターリン「ソ同盟共産党（ボ）中央委員会総会」、スターリン全集、第11巻、191ページ。
- (17) スターリン「国の工業化およびソ同盟共産党（ボ）内の右翼的偏向について」、スターリン全集、第11巻、298ページ。
- (18) スターリン「ソ同盟共産党（ボ）内の右翼的偏向について」、スターリン全集、第12巻、60ページ。
- (19) スターリン「国の工業化およびソ同盟共産党（ボ）内の右翼的偏向について」、スターリン全集、第11巻、276ページ。
- (20) スターリン「外国労働者代表団との会談」、スターリン全集、第10巻、229ページ。
- (21) スターリン「第一回アメリカ労働者代表団との会談」、スターリン全集、第10巻、113ページ。
- (22) スターリン「ソ同盟共産党（ボ）内の右翼的偏向について」、スターリン全集、第12巻、92ページ。
- (23) この意味からして、プロレタリアートの独裁とは、事実上プロレタリアートに対する独裁というものである（M. S. ヴォスレンスキー、佐久間稔訳「ノーメンクラトゥラ」、中央公論社 88年、91ページ。）

9. マルクスが社会主義社会を建設したら

ここでの問題はこうである。スターリンではなく、マルクスあるいはエ

ンゲルスが社会主義また共産主義の社会の建設に携わったとしたら、崩壊したかの悪名高いスターリン型あるいはソ連型といわれるそれとは違っていた、自由で民主主義的で豊かな社会主義また共産主義の社会が建設されていたのではないかというものである。このような疑問ないし反論に対しては、断定的な答えはできない。何故なら、実際にマルクスたちはこれに携わらなかったのだから、どうなったであろうかなどとはとても正確には答えられないからである。しかしある程度の推定はできる。答えはノーである。

これまで述べてきたスターリンの行動またその実際に行ってきた政策は、ロシアという資源の広大な国で、しかし経済の発展水準では先進諸国よりはかなり遅れた国で、これら先進資本主義の国々に包囲されながら、全く単独で、マルクスたちのいう社会主義社会を建設しようとするならば、遅かれ早かれまた多かれ少なかれスターリン型といわれるような中央集権的指令経済の独裁国家にならざるをえないということである。

マルクス・エンゲルスはいたるところで、社会主義国家はプロレタリアート独裁でなければならないといている。そして国家は暴力装置であり、社会主義国家も「自由のためでなく、自分の敵を抑圧するため」⁽²⁴⁾のものであるといている。レーニンはこのマルクスらの考えを忠実に守り、「どんな法律によっても、絶対にどんな規則によっても束縛されない、直接暴力に依拠する権力」⁽²⁴⁾としてのプロレタリアート独裁のソヴェト国家、実質的にはプロレタリアートの前衛を誇称する共産党の支配する独裁国家をつくった。スターリンもまたこの道を忠実に進んだにすぎない。

マルクス・エンゲルスは社会主義国家は先進諸国でつくられるといたした。スターリンは、ロシアができるだけ速やかに先進工業国の工業水準に「追いつき追いこす」政策をとることによって、マルクス・エンゲルスのいう社会主義国家形成の条件をつくるべく努めた。

マルクス・エンゲルスは社会主義革命は世界革命だといった。スターリンは東欧、朝鮮、キューバ、ヴェトナム等の社会主義革命を成功させるの

に直接間接貢献することによって、若干の時間的ズレはあったが、社会主義革命＝世界革命の理論を現実のものとして実現した。

マルクス・エンゲルスは資本家・地主のいない社会を目指した。スターリンはこれを完ぺきまでにソ連で遂行した。

マルクス・エンゲルスは貨幣・商品なき、市場なき経済を志向した。スターリンは、市場なき経済を完全には実現できなかったが、その目的に向かって最短距離の道を走っていった。ソ連は、20世紀に考えられ得る最も市場に依存することのない経済制度であった。(カンボジアでポル・ポト派が完全非市場経済の社会主義社会の建設を試みたが失敗した)

マルクス・エンゲルスは土地をも含む生産手段の私的所有の廃止と経済の計画化を社会主義・共産主義社会の中心的課題とした。スターリンはこれを可能なかぎり実行した。ロシアのような広大な国で、また大工業のある複雑な経済体系のある社会で、共同体所有のような社会の実現は事実上不可能である。企業を国有化した集中的計画経済でなければならない。ユーゴスラビアのような小国で、共同体所有に近い形の社会主義計画経済を実行したが、結局これが失敗したことは周知の通りである。農業については、さすがに、すべてを国有化(ソフォーズ)することはできなかったが、上からの強制的集団化(コルフォーズ)はその方向を目指したものである。

以上から推定すれば、たとえマルクスとエンゲルスが、いかにばら色の理想社会を描いたとしても——またスターリンも同様なことをいっていたのであるが⁽²⁶⁾、実際に彼らが、レーニンのあとを追って、ロシアで社会主義社会をつくっていかうとすれば、この社会はスターリンがつくったようなそれ、いわゆるスターリン型社会主義社会ないしそれに類するものにならざるをえなかったであろう。

注. (24) エンゲルス「ペーベル宛の手紙」、マルクス・エンゲルス全集、34、109ページ。

(25) レーニン「独裁の問題の歴史によせて」、レーニン全集、第31巻、354ページ。

ジ。

- (26) スターリンはいつている。共産主義社会では、「科学と芸術は完全な繁栄をとげ、……そこでは一かけらのパンの心配や、此の世の強者にへつらうこともなく、個人は真に自由なものとなるであろう。」（第一回アメリカ労働者代表団との会談、スターリン全集、第10巻、151ページ）

10. 粛清はスターリンに固有なものか？

スターリンが、粛正という名で、数十万、数百万、ときには一千万をはるかに超えるといわれる人々を殺害したことは、いまでは世界で知らないものはいない。しかし、その詳細な実態については、今日でも明らかではない。ただ次のことはいえよう。ブハーリンやジノヴィエフなどのかっての同志やトゥハチエフスキー元帥をはじめとする大物や有名人、また上位のクラスのもを処刑する場合には、スターリンが直接命令を下したであろうけれども、その他の一千万を超えるといわれる人々すべてについては、スターリンといえども、形式上はともかく、その処刑に直接関係していたとは思われない。恐らくこれらは、実際にはNKVD（内部人民委員部）やMGB（国家保安省）その他の関連機関の下部組織や地方の組織が関係したのであろう。

これら粛清された人々のうちには、「スターリン万歳！」と銃殺隊の前で叫んだものもいたという⁽²⁷⁾。これが事実とすると、われわれは二・二六事件で銃殺された将校たちが、銃殺直前「天皇陛下万歳！」と叫んで死んでいったことを思いださずにはおられない。また、ヒトラーの場合と違って、スターリンについては、彼を暗殺するような陰謀が企てられた事実はこれまでのところ聞いたことがない。また、第二次大戦において、スターリンが緒戦においてあれだけドイツ軍に痛めつけられ、膨大な人的物的損害を受けた——その責任の多くはスターリンにあった——にもかかわらず、スターリンに対する不平不満は殆ど聞かれず、ソ連国民の信頼は絶大であっ

たという事実。これらからして、スターリン体制というものは、第二次世界大戦のわが国の天皇制のように、彼は当時すでに一種の神的存在としての皇帝であって、彼個人の性格、彼個人の振舞といったような次元を超えていたように思われる。

勿論、粛清に関して彼の個人的性格や個人的振舞も大いに責任があるが、しかしその全部ではない。しかも、それは比較的当初のことであろう。粛清全体に関しては、マルクス・レーニン主義にもとづいてきたスターリン体制そのものであったのではないか。スターリン体制にはそういう土壌ができていたのではないか。その土壌の上に、たまたまスターリンのような性格と振舞をもった人物があらわれて、大量粛清という残忍な大木が育ったのではないか。だからスターリンでなくても、彼に似たようなタイプの人物があらわれれば、そして30年代のような環境のもとでは、規模は別として、この種の粛清は行われたのではないか。このような推測が、完全的外れでない証拠には、第二次大戦後生まれた東欧などの社会主義諸国において、規模はたとえスターリンのそれほどではないとしても、あちこちで同種の粛清現象が見られたことを挙げてみればおのずからうなずかれよう。

もしマルクスやレーニンが権力をとった場合はどうであろうか。社会主義社会が、たとえスターリンがその建設に携わらなくても、それに携わるものがマルクスやレーニンだったとしても、遅かれ早かれ、この社会主義社会が中央集権的指令経済の社会になったであろうことは、既に述べた。この場合、もしスターリンではなく、マルクスやレーニンが、この社会主義社会の建設に携わったとしたら、その過程でスターリンが行ったような粛清は全くなかった、あるいはその可能性は全くなかったといえるであろうか。この粛清は、全くスターリンの個人的性格によるものであって、マルクスやレーニンとは無縁のものであると断言してよいであろうか。もしこの断言が正しいとするならば、マルクスやレーニンの個人的な性格や振舞はスターリンのそれとは全く似ても似つかぬものであり、極めて暖かく

心優しいものとなろう。スターリンだけが冷酷で粗暴ということになる。しかしこのようにいってよいであろうか。

スターリンは「氣むずかしく、神経質であった」といわれている。また「偏執狂あるいは少なくとも顕著な偏執狂的傾向があった」⁽²⁸⁾ともいわれている。しかしレーニンも「彼の部下たちを無慈悲にかりたて、(党外の)おだやかな反対者に対しても極めて非寛容であった」⁽²⁹⁾といわれている。また「集中収容所、人質の射殺や Cheka (反革命運動、怠業および投機取締非常委員会) の過度の行為にレーニンは責任がある」⁽³⁰⁾ともいわれている。

レーニンについては、レーニン自身に語らせるとその性格なり振舞が大體わかる。彼はいつている。「これらの人民の敵、社会主義の敵、勤労者の敵には、なんの容赦もいらぬ。金持とその寄食者であるブルジョア・インテリゲンチヤに必死の闘いを宣言せよ」、「金持ちとペてん師——それは一つのメダルの両面である。それは資本主義にそだてあげられた寄生虫の二つの種類である。それは、社会主義の主要な敵であって、その敵は、全人民の特別の監視のもとにおかれなければならない、社会主義社会の規則にすこしでも違反したならば、容赦なく制裁しなければならない」⁽³¹⁾

これらからして、レーニンが、スターリンよりはるかに人間的で寛容のある人物であるといえるだろうか。この二人をめぐる若干の条件や環境の差はあるだろうが、それを考慮にいれても、レーニンだったら、たとえ中央集権の全体主義的国家であっても、肅清のような行為は全くしなかったであろうなどと断定的にいえるだろうか。レーニンはソ連が社会主義社会を建設するという軌道に入るまえに死んだ。だから大量肅清といった事態に進むことはなかったが、だからといって、彼にはその気配は全くみられなかったといえるだろうか。極めて疑わしいといわねばなるまい。

マルクスについていえば、彼を信奉するものによれば、マルクスは「絶対に正直で、絶対に無邪気で、絶対にウソをいうことができない大男であった。何よりも彼の心は清く、彼はその心をいつでも貧乏な人々、弱い人々によせていたのである。」また、たとえ彼が「旧友に対して悪口雑言の

かぎりをつくしている」場合でも「それは小人の争いではなく、清き心のいかりというものである。問題が公的な問題であるときに、かげでグズグズいわず、公然とその相手の悪性を暴露するのは、彼が正直であり、自信がある証拠である。」と。⁽³³⁾

このようなマルクスの評価は主観的すぎる。いったい人は家族でもない、また特別親しいものでもない他人に対して、この人は「絶対にウソをいわない」とか「絶対に正直である」とか断定できるであろうか。大内兵衛氏は社会学者である。氏がたとえいかにマルクスを尊敬してしようと、願望を客観性と混同してはならない。

マルクスの悪口雑言は有名である。大内氏もこれを認めている。マルクスはいたるところで、「浅薄」「無良心」「無能」などと論敵に対して悪罵を浴びせかけている。一般の人々はこういう人物をどうみるだろうか。謹み深く、寛容があり、冷静な人物とみるだろうか。そうではない。こういう人物は、自説を絶対視し、自分の意に反するような者に対しては、これを絶対に許さず、口汚なく罵る狭量な人物とみるだろう。このような見方のほうが普通であろう。E. H. カーはマルクスの性格について書いている「彼は、自分の意見が正当であることを知る。すると直ちに、自分と意見を異にする者は馬鹿か悪者である、と思った。彼は自分の仲間を多数蹴飛ばし、かつ憎んだ⁽³⁴⁾」と。このようなカーの見方のほうが当たっているのではないか。

有名なマルクスの質疑応答を引用してみよう。

問. あなたのもっとも高く評価する特質……答. 一般の人間にあっては素朴, 男性にあっては力, 女性にあっては弱さ。

問. あなたの性格の特徴……答. 一貫した目的を追うこと。

問. あなたにとって幸福とは……答. 闘うこと。

問. あなたにとって不幸とは……答. 服従すること。

問. あなたが最も嫌悪する欠点……答. 奴隷根性。

問. あなたの好きな標語……答. すべてを疑え。⁽³⁵⁾

この他にいくつかの問に対するマルクスの答があるが、それはここでは省略することとして、このような問に対してこのような答をだす人物を人々はどのように見るであろうか。大内氏などは極めてすばらしい立派な性格の持ち主とみるだろう。しかし果たしてそう見てよいであろうか。彼が革命家であり、彼が権力をとった上で、つくろうとしている社会は、プロレタリアートの独裁という中央集権的計画経済の国家であることを考えるとき、彼の答えから判断される彼の性格を肯定的にみることは極めて危険であると思う。この答えから判断されるマルクスの性格は、力を好み、人に屈服することを極度に嫌い、闘うことに生き甲斐を感じ、かつ他人に対して極めて疑い深いということである。このような性格の持ち主であるマルクスが権力をとった場合、権力保持者としてどのように振舞うであろうか。自分の考えた社会をできるだけ思い通りに建設するために、そしてまたそれに必要な政策を遂行するために、全く妥協することなく、これに反対するものまたその疑いのあるものを力をもって排除しようとはしないだろうか。彼のつくろうとしている社会が、このような振舞をチェックできる民主社会なら危険はないかもしれない。しかし、彼がつくろうとしている社会はそうではないのだ。

以上からして、マルクスにしてもレーニンにしてもスターリン的粛清とは全く無縁な人物だと確信をもっていえるだろうか。残念ながらいえそうもない。エンゲルスについては、マルクスらと比較してみれば、寛容で謹み深い性格の持ち主のようにみえる。しかし、そうだったとしても、彼がマルクスと思想的に密着し、マルクスに従って行動しているかぎり、エンゲルスといえども完全にスターリン的粛清と無縁であるとはいいきれないであろう。

注. (27) W. ラカー「スターリンとは何だったのか」、白須英子訳、草思社、1993年、200ページ。

(28) N. トルストイ「スターリン——その謀略の内幕」、新井康二郎訳、読売

新聞社，1983年，62ページ。

- (29) W. ラカー，同上，189ページ。
- (30) A. Nove, *ibid.*, p. 13.
- (31) A. Nove, *ibid.*, p. 13.
- (32) レーニン「競争をどう組織するか?」，レーニン全集，第26巻，421ページ。
- (33) 大内兵衛「マルクス・エンゲルス小伝」，岩波新書，1980年，5～6ページ。
- (34) E. H. カー「カール・マルクス」，石上良平訳，未来社，1956年，90ページ。
- (35) P. デュラン「人間マルクス」，大塚幸男，岩波新書，1972年，168～169ページ。

エ ピ ロ ー グ

思想は宗教と類似性があり，また共通性がある。双方とも，多かれ少なかれ排他性がある。したがってこれらが国家権力と結びつくとき，全体主義や独裁政治と結びつく危険性がある。その思想が排他性の強いものほどその危険度は高い。マルクス主義あるいはマルクス・レーニン主義といわれる思想はその危険度の高い最たるものの一つである。

それは，第一に，政治権力と結びつくことを必要とする思想である。この思想は政治権力を握ってはじめて意味のある思想である。マルクス・レーニン主義にもとづく社会主義社会は，これを志向するもの，その思想をもつもの，つまりマルクス・レーニン主義者が権力を握らなければ永久に実現しないものである。

したがって，第二に，この思想は実戦的思想である。社会主義社会を実現するための実戦活動，そのための労働運動・社会運動そして革命運動を要求するような思想である。単なるアカデミックな思想ではない。マルクス・レーニン主義の始祖，マルクスやレーニンはそのように行動した。

第三に，スターリン型社会主義といわれるソ連や旧東欧の社会主義社会

＝中央集権的独裁国家は、マルクスやレーニンの思想を忠実に実現しようとした結果生まれたものである。マルクス・エンゲルス・レーニンそしてスターリンが描いていたような自由で豊かな共産主義社会の実現は、考えられうる歴史的時間の範囲内では、単なる空想であり夢である。

第四に、自由に企業を起こしたいと思ったり、また人を雇ったり雇われたりしたいと思うこと、さらにはものを売ったり買ったりしたいと思うこと、つまり資本主義社会で人々が通常考えていること——より一般的には資本主義的思想——と、マルクス・レーニン主義の思想とは根本的に相いれないものである。後者の考える社会は、前者の考えること、つまり資本家になろうとか、企業家になろうとか、自由に売ったり買ったりしようとかいう考え方とその実行の否定の上ではじめて実現できるしまた存在可能なものなのである。したがって、マルクス・レーニン主義の思想は、今日多くの人々が多少とももっている資本主義の思想に対し、極めて排他性の強い思想である。